

令和 7 年度 県立土浦第二高等学校自己評価表

目指す 学校像	自律的で責任感のある人間として、多様な価値観をふまえ協働して活動し、現代社会を生きるための柔軟な思考力・判断力・表現力をもって、客観的に分析・考察することのできる人材を育成します。 1 未来に必要な資質・能力を身につけ、個々の学力の伸長と進路希望の実現を図る学校 2 豊かな感性や人間としてよりよく生きていく力を高める学校 3 保護者や地域との連携を推進し、信頼される開かれた学校		
昨年度の成果と課題	重点項目	重点目標	達成 状況
1 国公立大学の合格者数は、8年連続で100人を超えた。生徒・保護者の進路希望をふまえ今年度も継続する。また、国公立・私立難関大学の合格者についても前年度以上に増加を図る。さらに、生徒の進路希望実現のための具体的方策を分析・検討するとともに、個々の学習意欲の向上と計画的な家庭学習の実践についての重要性を説き、確立を図る。	1 授業の充実と学習習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業の工夫・改善により、新しい時代に必要となる「学びに向かう力、人間性等の涵養、生きて働く知識及び技能の習得、未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力等」の育成を図る。 	B
		<ul style="list-style-type: none"> ICT環境を適切に活用した学習活動の充実を図るとともに、学びの保証に備えた多様な教育形態を強化する。 	B
		<ul style="list-style-type: none"> 観点別評価をより明確にしなが、年間指導計画に沿った授業展開と自学自習の習慣化を図り、自主学習時間を増加させる。自主学習時間の目安を、1年生3時間、2年生4時間、3年生5時間とする。 	B
		<ul style="list-style-type: none"> 担任と生徒の個別面談の推進（年間4回以上）。 	A
		<ul style="list-style-type: none"> 生徒一人一人の進路実現のために、平常日・長期休業中において、各学年・各教科の組織的・計画的な課外活動の実施。 	B
		<ul style="list-style-type: none"> 土曜講座・学習会を開講する。 	A
2 部活動参加率は85%と活発な活動が行われ、各種大会で優秀な成績を収めている。また、学校行事をはじめ、委員会やボランティア活動についても、生徒主体の運営体制の強化を目指す。	2 授業改善	<ul style="list-style-type: none"> 授業改善推進チームを中心として、校内研修や学習会により、授業を振り返る活動を推進する。 	B
		<ul style="list-style-type: none"> 「生徒の授業満足度」について、授業担当者の80%が評価平均3.5以上とする。 	B
		<ul style="list-style-type: none"> 「DXハイスクール」事業を活用し、探究的な学習活動をより推進させる。 	
3 年間3回の生徒個別面談週間、年間2回の保護者面談等を通し、保護者との連携を図りながら生徒の指導にあたっている。授業公開やホームページ、グループウェア等を活用し、さらなる情報発信を推進し、本校の教育活動に対して、保護者や地域関係者の協力や理解を得ることを	3 特別活動の充実と基本的生活習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> ホームルーム・委員会・部活動などの生徒の主体的活動を支援し、道徳的実践力を高める。 	B
		<ul style="list-style-type: none"> ルールやマナーを守る土浦二高生としての品格ある行動を確立させる。 	B
		<ul style="list-style-type: none"> 生徒各自がスケジュールを管理し、自律的で責任ある生活習慣を確立させる。 	A
		<ul style="list-style-type: none"> 教室の清掃を始めとした校内美化活動を通して、奉仕の精神と豊かな心を育成し、安心・安全な学校生活を確立する。 	A
	4 国際理解の推進	<ul style="list-style-type: none"> 海外研修を継続的に推進し、留学の受け入れや海外の教育機関との国際交流活動を積極的に取り組む。 	A
		<ul style="list-style-type: none"> 多様性に配慮することのできる将来のグローバルリーダーとしての素養を養い、複雑化する社会課題の解決に向けた、国際人としての行動力を身につける。 	B

目指す。	5 保護者及び地域との連携の推進	・保護者面談を計画的に実施してニーズに応える情報提供に努めることで、教育活動への理解と支援を得る。	A
		・魅力ある学校行事を創意工夫して、保護者の積極的参加を促す。	B
		・ホームページの定期的更新と広報資料（学校パンフレット等）の充実を図り、教育活動の情報を広く発信する。	B
		・地域資源の活用や高大連携の活動を充実させ、地域に発信する。	B
	6 働き方改革	・教職員の共通理解を図り、新たな教育課題等に適切に対応できる学校体制の構築し、限られた時間の中で教員の生徒と向き合う時間を確保し、教育の質の向上を図る。	B
		・業務のICT化を一層推進し、業務の効率化とペーパーレス化、類似業務の統廃合を行う。	A
		・家庭や地域と学校の役割分担を見直すために、家庭や地域への情報発信を推進し、意見聴取しながら校務に反映させる。	B
		・教員以外の専門スタッフ等の体制拡充と外部人材の活用推進。	A
		・教材教具等の共有や外部の教育資源とデジタル教材の活用推進。	B

三つの方針		具体的目標
三つの方針 (スクール・ポリシー)	「育成を目指す資質・能力に関する方針」(グラデュエーション・ポリシー)	豊かな人間性、幅広い知識と柔軟な思考に基づく判断力・行動力を有し、変化の激しい社会を心豊かにたくましく生きる人材を育成する教育活動を通して、魅力と活力ある学校を目指す。 1 未来に必要な資質・能力を身につけ、個々の学力の伸長と進路希望の実現を図る学校。 2 豊かな感性や人間としてよりよく生きていく力を高める学校。 3 保護者や地域と連携し、信頼される開かれた学校。
	「教育課程の編成及び実施に関する方針」(カリキュラム・ポリシー)	1 授業の充実を図り、知的好奇心や学習意欲を高め、自主的・能動的な学習習慣を確立させる。 2 組織的・系統的なキャリア教育を充実させ、自己探求や自己実現に努める生徒を育てる。 3 特別活動等への積極的な参加を促進し、豊かな感性や道徳的実践力を高める。
	「入学者の受入れに関する方針」(アドミッション・ポリシー)	1 「夢探し! 夢づくり!! そして、夢のゴールへ!!!」のキーワードのもと、夢の実現を目指す生徒。 2 現代社会を生きるための実践的で幅広い知識・技能の習得に努める生徒。 3 柔軟な思考力・判断力・表現力の習得に努める生徒。 4 多様な考えを受容し、協働して課題解決に努める生徒。

令和7年度 教科・分掌・学年等の目標達成状況と課題

評価項目	具体的目標	具体的方策	達成状況	評価	次年度(学期)への主な課題
教科 国語	基礎学力の向上に努める。	教科書および文法書、便覧等を活用し、古典についての基本的な知識を身につけさせる。	紙媒体の教材に加えてデジタル教材も利用し、また小テストにより習熟度を見極めながら、古典についての基本的な知識を身につけさせることができた。	A	A (1) 次年度も継続的な基礎学力の定着を図る。 (2) ICTをより活用できるように、実践例を踏まえた効果的な方法を模索していく。 (3) 受験を意識した小論文指導を、どのように系統立てて行うべきか。他教科を含め学校全体が取り組むべき課題として考えていく必要がある。
		教科書および参考書等を活用し、読解に必要な概念や語彙を身につけさせる。	紙媒体の教材に加え、画像・映像等をICTを活用して紹介し、読解に必要な概念や語彙を身につけさせることができた。	A	
	受験に対応できる学力を涵養する。	授業内容を精選し、論理的思考力に裏付けられた応用力を身につけ、多様化する入試に対応する力を培う。	多様な分野の文章に触れさせ、要約・記述等の訓練を行い、入試に対応する力の育成を図った。	A	
		新傾向に対応した問題演習を反復し、ICTを活用しながら実践的な国語力を伸ばす。	問題集等を活用し、新傾向に対応した演習を繰り返し行った。ICTによる双方向の活用を効果的に行うことができた。	A	
	小論文を書く力を育成する。	様々な文章を批判的に読むことで、思考力を養う。	自分の意見を文章化させたり、個人・グループによるプレゼンテーションを行わせたりして、表現力の涵養に努めた。	B	
		論理的な思考をもとに、的確に表現する方法を身につけさせる。	意見文の作成やグループでの意見交換など、筆者の思考を読みとるだけでなく、様々なとらえ方や考え方ができることを、授業で実践できた。	A	
家庭学習習慣の定着を図る。	自学に対応した課題を実施し、物事を深く探求する力を養う。	毎週末取り組ませる課題を精選し、自学による探究心を養った。	A		
地歴公民	学力の向上を図る。	受験学力養成のため定期試験を工夫し、解説を通して理解を深めさせる。また、職員自らが受験問題にあたり、傾向や難易度を把握する。	新課程入試を想定した指導を行った。特に定期テストでは、各科目で思考力の育成を図るための問題作成に取り組んだ。また、職員自らが共通テスト、国公立・私立大学の入試問題にあたり、出題傾向とその変化を把握できるよう努力した。	A	A 新課程の完成年度を迎え、科目ごとの特性も見え始めるなか、今後、どの科目を選択すべきなのか、問題の内容や入試結果について分析・検討を行う必要がある。現状として、授業時間確保や進度の改善などが最大の課題である。旧課程と比して、新課程は探究的な学びの充実が強く求められている。引き続き、生徒が主体的に学びを展開し、思考力を養成するための授業内容の精選や工夫を行ってきたい。また、考査における論述問題の出題、課題等を通して記述力・表現力の向上を目指していく必要がある。
		生徒の希望や状況に応じた課題を示し、ICTを活用しながら個別の指導を行う。	毎時、電子黒板を使用しての授業、生徒用個人端末(パッド・スマートフォン)の活用、Google for Educationの各種ツールを組み合わせることによって、リアルタイムで疑問点を解決し、授業内容の理解を深めるなど積極的にICTを活用する取り組みを行った。	A	
	家庭学習習慣の定着を図る。	効果的な課題提示を工夫・実践し、家庭学習の定着を図る。	学年に応じて、他教科とのバランスを図りながら、適切な量の課題を設定することができた。基礎的な内容の定着を図るための効果的な家庭学習の計画を提示し、地歴公民科の科目へ意欲的に取り組むことができるよう働きかけた。	B	
	現代社会の諸問題との関連性を考えさせる。	資料やデータを多角的に分析して、視野の拡大や異なる考えに対する柔軟性を涵養する。	2学年の必修科目である「公共」を中心に、他科目も含めて現代社会の諸問題を考察する視野を養成することに努めた。多角的な視点で物事を考察できるように、より効果的な資料活用を行った。	A	
		主権者教育を授業の中に取り入れ、生徒の主体的、実践的態度を育成する。	租税や選挙制度、法律など多く問題を授業を通じて考えることができた。主に「公共」や「政治経済」の授業が中心であるが、積極的に他科目でも関連する場面を設定し、主体的な態度を育成することに努めた。	B	
数学	基礎的・基本的な知識・技能の定着 思考力・判断力・表現力の育成 主体的に学習に取り組む態度の育成	生徒の実態に応じた指導計画と指導内容・方法の工夫改善を図る。	「『個別最適な学び』と『協働的な学び』」の一体的な充実を実現する学習指導および研究等に取り組むことが出来た。数III習熟度においては生徒の実態に応じて効果的に指導を進めることができた。	A	A (1) 今後、遠隔授業等の取り組みが進む中で、より充実した学習活動となるよう、指導方法・環境づくり等について研究していく。 (2) 生徒がICTを使う場面の設定について引き続き研究していく。 (3) 生成AIの活用率はまだ高くはないが、徐々に広がってきているため個別最適な学びの伴走役として活用できるように、教員間の学びを深め、共有しながら指導していくことが課題である。 (4) 教育課程に関して、入試の動向を見ながら柔軟に変更できるように検討を続けていく必要がある。 (5) 数III習熟度授業では最上位層と最下位層がはっきりと浮かび上がったので、そこへの対応をさらに手厚くする手立てを模索していく。
		教科書を用いた学びを中心とし、副教材・小テスト・単元テスト等の活用を通して、生徒に自分自身の学びを振り返らせる手立てを講じる。	問題集の取り組み状況や小テスト・単元テスト・課題確認テスト(夏休み)の結果を用いることにより、観点別学習状況の評価をより充実させることが出来た。	A	
		問題演習の時間を十分に確保し、生きて働く論理的思考力の育成を図る。	普段の授業において講義と演習のそれぞれの場面にメリハリをつけるとともに、外部模試の活用により、生徒がしっかり考える時間を確保することが出来た。	A	
		生徒を丁寧に見取り、生徒の実態を鑑み必要に応じて課題設定・手立てを講じる。	定期的な課外・ニーズに応じた課外の実施および自由提出の添削課題の設置等により、「個別最適な学び」を推進することができた。	A	
	ICTの活用	電子黒板・Google Workspace等を教員が活用し、生徒の効果的な学習に資する。	連絡板・教材倉庫としてC-learningやGoogle Classroomを用い、学習環境の充実を図ることが出来た。	B	
教科事務の円滑な遂行	学年教材費予算管理、教科書選定、教科書早期使用、消耗品の管理等について、隣学年へ事務手続の継承を図る。	隣学年と連携を取りながらスムーズに事務手続を行うことができた。	A		
理科	学力の向上。	基礎的な知識を確実に習得し、さらに応用的な内容についてもしっかりと理解できるように授業を展開し、学力向上を図る。	ペアやグループでの言語活動や小テストなどを実施し、基礎力・思考力・表現力を高めることが出来た。	A	A (1) 相互授業参観をもっと行い教科横断的な指導を行いたい。 (2) 大学の個別試験等では分野横断的な問題が多い為、授業の中で他の単元との関わりを意識させる授業を行いたい。 (3) 実験や、授業の中で探究的な問いかけを行い思考
	実験・観察を通して自然に対する関心や探究心を高める。	共通テストや個別試験等に提出された実験内容を、各科目で検討して考察方法などを理解させるとともに、授業内での実験・観察を通して自然観を身につけさせる。	入試を意識して、実験を行い実験プリントを通して思考力を養うことができた。	B	
	家庭学習の習慣化。	定期的な課題を提供し、自学自習による課題提出を通して、ICTを活用しながら家庭学習の習慣化を図る。	小テストやスタディサプリ(1年)及び、ロイノートをを用いての演習により学習習慣を確立させることが出来た。Google formやGoogle class roomを用いて生徒の楽手状況が把握できた。	A	

令和7年度 教科・分掌・学年等の目標達成状況と課題

評価項目	具体的目標	具体的方策	達成状況	評価	次年度(学期)への主な課題 (3) 実験や授業の中で探究的な問いかけを行い思考力の向上に努めたい。	
教科	入試制度の研究。	共通テストに対応できる学力を身につけさせるために、入試制度の研究を進める。	各教科で共通テストや入試研究を行うことができた。また、教科間での指導法の共有を行い指導力向上に努めた。	A	(1) 次年度も生徒の興味関心や理解度を深めるために、ICTを活用する。 (2) グループワークを通じて、知識を活用し思考力、判断力を高め、他者と協力することで集団としての達成感を味わわせる。 (3) 体力テストにおいて自己の体力を確認し、保健や体育の授業や他教科の分野などの知識を活用して、生徒自身が体力を高める方法がわかり、計画、実践できるようにする。 (4) 技能を伸ばすことで自尊感情を育て、積極的に関わろうとする態度を育てる。 (5) ICTを活用して、自ら調べたり、修正に活用したり、発表ができるようにする。	
	保健体育	健康安全について理解を深め日常生活で生かせるようにする。	ICTを活用した視聴覚教材・資料等を効果的に活用し、学習の理解度を高める。 グループワークを取り入れ、言語活動を活発にさせる。	保健ではスライドや視聴覚教材を利用して、興味関心を高め、理解を促進した。保健や体育の授業中にペアワーク、グループワークを通じて、自分の考えをまとめたり、他者の意見を取り入れて合意形成を図ることが出来た。		A
		体力の向上を図る。	体力テストの結果から自己の体力を把握させ、体力の向上を目指し年間を通して継続的に体力トレーニングを行う。	高校生活で体力を向上して活動の基盤を作ることが出来た。		A
	運動技能を高め運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする。	基礎的技能を学ぶなかで課題を設定させ、練習に取り組みゲームを楽しむ。ICTを活用するなど、お互いに教えあう活動を取り入れ、助け合いながら運動技能向上を図る。	体育科全体で設定したスキルテストに取り組むことで技術を伸ばしつつ、ゲームでの活用方法を学び仲間と協力する楽しさを味わうことができた。動きを動画やデータを活用して理解を深めたり、動画分析のアプリを使用しながら技能の改善につなげることができた。	A		
芸術	学びの意義を実感できる学習活動の充実。	美的情操を培う各科目における教材、指導方法の精選。	どの教科においても生徒の状況に合わせた教材・指導方法を工夫し行うことができた。芸術として各科目をとらえ、美しい表現を考える学習活動ができた。	A	(1) 次年度も鑑賞に言語活動を取り入れ、よりよい表現方法につながるよう、考える授業展開・指導方法をさらに工夫していく。 (2) ICTをどの場面で取り入れたら効果的かを考え、よりよい指導方法を研究していく。	
	表現と鑑賞の能力を高める。	ICTを活用しながら鑑賞授業を充実させ、鑑賞で得た知識を表現に生かし有機的に関連付けながら、両面の学習活動を進行し、芸術表現に必要な技能を身につけさせる。	鑑賞授業にICT活用を取り入れ、鑑賞活動を活発にし、生徒の表現に生かす学習活動ができた。鑑賞活動から芸術表現に繋げる技能を身につけさせる学習展開ができた。	A		
	芸術的感性と言語能力の向上。	生徒同士で積極的に意見を交換する場面を設定し、活発な言語活動を行う。感性を高めあい、お互いに創意工夫しよりよいものを創る姿勢を育む。	ペアワークやグループワークを取り入れ、鑑賞活動を中心に積極的に意見を交換する場面を設定することができた。言語活動を行うことでよりよいものを作る姿勢がみられた。	A		
英語	4技能の習得を図りながら学力の向上を目指す。	生徒の実態に応じた指導計画の改善と工夫を図る。	それぞれの学年に応じた到達目標から逆算して、副教材を厳選しながら、4技能の定着と向上を図った。定期考査や模試の結果を分析し、課題となるような分野を見極め、その部分を補完するような活動を重点的に行った。	A	ICT機器の活用や小テスト・資格検定の奨励により、効率的な知識習得と学習サイクルの確立に努めた。一方で、家庭学習や多読指導においては、課題をこなすことが目的化してしまう傾向も否定できず、主体的な学習姿勢の育成は依然として課題である。また、学習不十分層への対応については、第1学年で「スタディサプリ」を活用し個に応じた指導等の成果が見られたものの、学年全体としては対応の手法や頻度に差が生じる結果となった。来年度は、定着した知識を「思考・表現」へとつなげる指導を強化し、共通テストや個別入試対応を含めた総合的な英語運用能力の向上を目指したい。	
		大学入学共通テストに対応するための技能を育成する工夫を図る。	授業内で長文読解やリスニングの時間を確保し、情報処理能力の向上を図った。長文読解のための単語・熟語・構文などの指導も行っている。	A		
		授業内のコミュニケーション活動を充実させる。	ペアワークやグループワークを通じて、生徒たちの発話の機会をつくった。ALTとの授業では、プレゼンテーション、ディベートなどを行い、お互いの意見を理解し合う活動を行った。	B		
		家庭学習、休業中の課題に副教材等を活用して多読の指導を行う。教材を精選し、様々な話題に触れさせることで視野の拡大に努める。	副教材を活用し、多様なトピックに触れさせることで知識の幅を広げようと試みた。様々な分野の語彙を修得し、読む力・書く力の向上と、背景知識の構築につながった。	A		
		小テスト・考査等を利用して語彙・文法・構文の定着を図り、表現力を高める一助とする。	範囲と予定を提示して小テストを実施し、計画的、継続的な学習習慣の確立を図るとともに、基礎学力の底上げに努めた。スタディサプリや、音読メーターの利用も、個別最適な学びの一助となった。	A		
		英検等の資格検定にも積極的に取り組ませ、意識を高める。	英検の実用性(外部試験利用入試など)を示しながら、2年生修了時まで英検2級以上の取得を目指し、学年ごとに英検取得を奨励した。	A		
		授業内でICTを活用する。	ロイロノートを使って予習や課題のやりとりやグループでの意見交換を行った。GoogleスライドやCanva、ロイロノートを活用し、生徒はプレゼンテーションの資料を作成した。	A		
		家庭学習習慣の定着。	学習課題の提出・点検及び授業の予習の徹底を図る。 学習が不十分な生徒については補習等で対応する。	授業の前に予習をロイロノートで提出し、授業担当が毎回点検を行った。学習課題は、事前に範囲と提出日を提示し、計画的な学習を奨励したが、提出がままならない生徒も一定数あり、今後の指導の課題となっている。 スタディサプリの活用や習熟度別の課外等で対応したほか、小テストの追テストを行った。		B A
家庭	自立した生活者に必要な基礎的・基本的な知識と技能を育成する。	実験や実習、観察や調査など実践的・体験的な学習活動を計画的に実施する。 定期テストや技能試験(提出課題での評価含む)を計画的に実施する。	各単元で計画的に実験や実習、観察や調査を実施した。 技能テストは実施できなかったがその代替として実習の授業観察と課題提出での評価を行った。単元ごとの確認テストはできなかったが、定期テストを実施した。	A B	(1) 生涯を見通して生活を創造する資質・能力を効果的に育成するために、他の教科と連携し、教科横断的な授業を行なっていきたい。	
	生涯を見通し、世界に目を向け、生活上の課題を解決するための実践力を育成する。	生徒がICTを活用しながら主体的・対話的に学習する場면을効果的に設定する。	学習者用端末を使って取り組む課題の充実を図った。	A		

令和7年度 教科・分掌・学年等の目標達成状況と課題

評価項目	具体的目標	具体的方策	達成状況	評価	次年度(学期)への主な課題	
		家庭学習時間の確保のため、各学年や各教科分掌等との連携を図りながら方策を検討する。 各学年と連携しながら課外授業(平日・土曜日・長期休業中等)、模擬試験を計画・実施して、一層の学力向上を図る。 多様な入試制度を整理・分析し、生徒との面談に活用できる適切な進路情報を提供する。 入試結果・模試結果を多面的に分析し、各学年や各教科の学習指導・進路指導の改善に寄与する。 各予備校等の教員対象の授業・研修情報を提供し、教員の授業力、受験指導力の向上に寄与する。 教員対象の進路研修会を実施し、今後の入試制度の変化に対応するために教職員全体で研究を進める。 高大接続改革及び大学入学共通テスト等に関する研究を継続し、保護者・生徒、教職員への情報提供を適宜行う。	課題・宿題の時期と量については検討の余地がある。スタディサプリについても今後取り組み方を考えていく必要がある。 学年・教科を中心に設定し、状況に応じた課外授業を展開することができた。土曜講座の見直しを実施し、1年生から段階的に廃止の方向で動いている。 入試方法の多様化に対応することはできたが、年内入試の指導については、やや後手に回ってしまった感は否めない。 構造的な課題についてはさらに分析・改善が必要である。 3学年担当者を中心に研鑽できた。 外部での研究会にも積極的な参加が求められる。 参加可能な限りは研究会に参加し、各学年に情報提供できた。	B A B A B B A		
生徒指導	規律ある生活態度や社会規範を順守する態度を育てる指導を、全教職員の共通理解のもとで推進する。 安全への意識を高め指導を推進する。 教育相談体制の充実を図る。 生徒指導上の情報の共有を推進する。	HRや特別活動、学校行事、授業等様々な場面において、挨拶と身だしなみを意識して指導し、基本的な生活習慣を身に付けさせる。 着こなし強化週間やさわやかマナーアップ運動等を通して、その意義を十分理解させ、生徒自ら規範意識の向上を図れるようにする。 校内の決まり事や公共マナーが守られているか、常にチェックする意識を持つ。 交通安全週間、長期休業明け交通安全指導時には、改めて交通安全の意識を持たせるように努める。 警察や関係機関との連携を密にし、不審者情報や交通事故情報等を迅速に提供する。また地域の方々から信頼を得られるように交通安全及び防犯意識を高める。 カウンセラーや環境保健部と連携し、生徒・保護者・教職員の要望を反映しカウンセリング活動の充実を図る。 ICTを活用して各学年からの生徒指導上の問題点や意見をとりまとめ、生徒指導の充実を図る。 研修会や情報交換会の内容など生徒指導に関する内容を提供する。 携帯電話・インターネットの安全な利用について周知させる。	登校指導等を通して挨拶運動や身だしなみの指導を行った。 さわやかマナーアップ運動や着こなし強化週間を通して規範意識を高めることができた。 外部のより公共マナーに関する指摘をいただいた。 交通安全講話を実施した。交通事故被害も減少している。 土浦警察署生活安全課との連携を密に情報交換をすることができた。 各学年担当者と情報共有をしながら、カウンセリング活動を充実させることができた。 Formsを活用し、学校生活アンケートや自動車免許取得願をデータ化している。 休業前後の生徒指導部講話で「間バイト」の危険性の注意喚起を行った。	A A B A A A A	A	(1) 挨拶運動や着こなしの強化については、引き続き継続し、規律ある生活を送れるよう指導していく。 (2) 不審者被害件数は依然として多いので、土浦警察署生活安全課と連携を密にしていく。 (3) カウンセリングの年間実施回数を維持し、生徒に寄り添った支援を継続する。
特別活動	生徒の豊かで、充実した高校生活のために、以下の事項を学年や他分掌と協力して実施する。 今後の部活動のあり方を検討する。 HR活動の充実。 特別活動の記録や広報活動の充実を図る。 特活行事の運営方式・日程・内容等の検討を行う。	部活動の地域移行が進む中で、それに対応できる環境を整えておく。また、生徒や顧問にとってより良い今後の部活動のあり方を検討していく。 部活動環境の改善に向けて、各部からの要望を集約し、予算要求をしていく。 部活動の学校外指導者を積極的に活用出来るように要望は続けていく。 各部の顧問と協力して、部室の管理や清掃の徹底を図る。 充実したHR活動が実施できるよう、各学年との協力関係を築いていく。 HRにおいて「キャリア・パスポート」を活用した記録を用いた話し合いや意思決定により、生徒一人一人のキャリア形成に努める。 体育館及び他の施設の使用の調整を図る。 壮行会・伝達表彰等を通して、生徒の活動の成果を積極的に発信していく。 部活動や行事の記録及び写真を保存し、広報活動や今後の活動に役立てる。 生徒会誌の記事の内容の充実を図る。 部活動の活動状況や成果をホームページ等で積極的に公開していく。 各種行事の日程や実施方法は随時検討し、より充実した学校行事を目指す。 定期的な生徒会役員との打ち合わせを実施し、生徒会活動の活性化を図るとともに、行事の企画力の養成を図る。 生徒会活動の年間計画を作成し、ICTを活用しながら、より充実した内容とするための方策を講じる。	新たな部活動運営方針に基づき、各顧問がより良い部活動の在り方を考えることができた。 受益者負担を考え予算作成方法を検討した。さらに、各部からの要望を検討した。 昨年度同様活用することができた。 部室回り清掃分担表を作成し実施することができた。年二回の一斉清掃を実施した。 各学年職員と協力して実施し、キャリア育成に努めた。 各学年職員と協力して実施し、キャリア育成に努めた。 利用するクラスがほとんどいなかった。 オンラインという新しい形が定着し実施できた。 各行事で他の係等と連携し、写真を残すことができた。 生徒会誌を発行することができた。 ホームページで部活動の活動状況、成果を掲示することができた。 行事の検討や実施方法について、生徒会役員や執行部との話し合いを繰り返し行うことができた。また、行事のしおり等をクラウド上で見られるようにした。 行事の検討や実施方法について、生徒会役員や執行部との話し合いを繰り返し行うことができた。また、行事のしおり等をクラウド上で見られるようにした。 行事の検討や実施方法について、生徒会役員や執行部との話し合いを繰り返し行うことができた。また、行事のしおり等をクラウド上で見られるようにした。	B A B A A A A A A A A A	A	(1) 部活動運営方針の改定に基づき、まだまだ検討していく必要がある。 (2) 体育館改修のため、行事・部活動等検討していく必要がある。 (3) 部活の予算作成に関してより良い決定方法を検討していく。 (4) 部室回りの清掃や活動場所の清掃、部室の管理など今後も検討していきたい。 (5) 今後も、部活動の成果公開等を積極的に取り組んでいきたい。 (6) 各行事の検討や運営を生徒会役員、執行部等が中心で行っていただけるように、話し合いを充実させていく。

令和7年度 教科・分掌・学年等の目標達成状況と課題

評価項目	具体的目標	具体的方策	達成状況	評価	次年度（学期）への主な課題
図書館	図書館の利用促進と委員会活動の充実を図る。	図書を充実させる。	生徒の購入希望図書や「探究の時間」や「年内入試」に有用な図書の購入をすることができた。	B	(1) 管理ソフト「egg」の使い方を含めた、基本的な図書館運営のためのマニュアルの必要性を強く感じた。 (2) 「総合的な探究の時間」で図書館を利用してもらうために、探究部とさらに連携を進める必要がある。
		生徒による委員会活動を活性化し、学校図書館運営に主体的に参加させる。	生徒が主体的に委員会活動に関われた。	A	
	図書館の機能充実を図る。	土浦市立図書館との連携を強化する。	土浦市立図書館の高校連携事業に積極的に参加することができた。	A	
		ICTを活用しながら「探究活動」を行うことができる図書館にする。	「探究の時間」に関連した図書の購入を推進したが、図書館を利用したICTを使った「探究の時間」は行われなかった。	B	
館内の環境整備を図る。	本の整理整頓、本の廃棄、蔵書点検	図書館部所属の教職員の入れ替えがあり、蔵書点検までは行えなかった。	B		
環境保健	快適な学習環境の整備。	清掃徹底週間を適宜実施し、特にトイレと手洗い場の清掃徹底を図る。	清掃開始時に校内放送で周知することにより、効果を挙げられた。	A	(1) 特に、冬季の窓の開放については随時注意喚起を行う必要がある。 (2) 使用前に、各クラスにて給油等の方法について周知してもらう必要がある。 (3) 次年度は、プライバシーや心情に配慮した取組をさらに工夫し、事前に生徒および保護者への説明を行う必要がある。 (4) 近隣住民は高齢化のためご参加が困難な場合が増えている。実施可能な訓練形態として何ができるかを検討する必要がある。
		教室の空気環境改善のため、天窓+対角線上の窓の開放と壁掛け扇風機による空気の攪拌を促す。	安全委員生徒の仕事として行うよう指示したが、必ずしも徹底していたとは言えない。	B	
		エアコン、ストーブの使用上の注意事項を守るよう指導する。	「セーフモード」の使用の徹底が課題であるが、それ以外については注意事項を守って使用できている。	B	
	疾病予防と健康管理能力の育成。	疾病予防教育の充実と、欠席状況を迅速に把握し、ICTを活用しながら感染症蔓延防止に取り組む。(健康チェックの输入の徹底)	達成できた。	A	
		感染症対策をしながら、各種検診・検査を円滑に進行できるよう工夫する。	事前の保健委員に対する説明を丁寧に行い、円滑に進行できた。	A	
		1年生対象の歯科衛生と性教育に関する講話を通して、生徒の意識を高める。	講話実施後にアンケートを行い、ふりかえりの機会を設けたところ、生徒ひとりひとりが自分事として受け止めることができたと考えられる。	A	
防災意識の向上と地域との連携。	「避難経路」、「巨大地震（震度5強以上）発生時の対応について」を年度初めに周知徹底する。また、改善すべき点を随時検討し、見直す。	年度初めにCラーニングにて保護者および生徒、教職員への周知ができた。年度途中での工事等開始があった場合の、避難経路再検討が必要である。	A		
	避難態度を一層向上させ、安全かつ迅速な避難誘導方法を工夫する。	避難訓練における生徒の避難態度は、消防隊員の方からもお褒めいただくほど静かで、かつ迅速であった。	A		
	避難訓練に於いて、感染症対策をしながら、生徒と周辺住民とが協力し合える訓練形態を工夫する。	周辺住民の方々のご参加については、計画およびご案内は行ったが、参加不可とのことだった。	B		
職員緊急連絡網を年度途中において必要の際に更新する。	年度途中での必要の際の更新ができた。	A			
渉外	家庭、地域、学校との協力体制をさらに強化する。	PTA評議員の活動を活性化し、ICTを活用しながら、生徒指導部と連携して、校外指導を実施する。	評議員会の出欠確認をC-learningを利用し、スムーズに行えるようにした。	A	(1) 総会で会則の改定が決議され、PTA支部会が廃止されたが、今のところ支障はない。今後それに代わる保護者の交流や情報収集の場を設けていけるとよいだろう。C-learning等の活用により、以前よりスムーズに保護者との連絡が取れるようになったが、一方で簡素化するあまりに保護者との距離が遠くになってしまう危険性もある。今後は「持続可能」で誰もが参加しやすくなるような魅力あるPTAの新しい形を模索していく必要がある。 (2) 来年度は体育館の長寿命化工事のため、体育館での総会開催ができないので、更なる新しい総会の形を考えなければならない。
		県や土浦市と連携し、さわやかマナーアップ運動等のあいさつ運動等に積極的に参加する。	11月4日のさわやかマナーアップ運動ではPTA本部役員ら6名が参加し、生徒会役員らとともに通道通学をする方たちに挨拶を促した。	A	
	保護者に学校の情報を積極的に提供し、教育活動への理解と協力を図る。	PTA総会への出席者数を増加させる。	総会は、昨年より多い506名(53.4%)の参加を得て行った。支部会の廃止が正式に決まった。また、今年度は保護者の情報交換の場としてクラス懇談会を復活させた。	A	
		研修委員会主催のPTA主催行事の充実を図り、参加者を増加させる。	PTA研修企画では、進路講演会に代えて研修視察旅行を数年ぶりに復活させ、東京大学視察&浅草散策バスツアーを企画し好評を得た。	A	
	尚網同窓会等に本校の情報を積極的に提供し、学校への関心を高め、教育活動を積極的な後援の推進を図る。	土浦二高PTA広報紙「であい」を年2回発行し、本校の教育活動を良く理解し、積極的な後援の推進を図る。	広報委員会が野球応援・あゆな祭・スポーツ大会などを取材し、広報誌「であい」の121号・122号を発行した。	A	
尚網同窓会等と連携を密にし、積極的に学校への後援体制の推進を図る。			B		
情報	情報発信の充実。	ホームページおよびスクールガイドの充実にも努め、広く情報を発信する。	全教職員へのホームページ編集権限の付与および編集手順の研修により、情報部だけでは対応しきれなかった可視性・迅速性向上に寄与した。また、スクールガイドレイアウトの大幅改善により、効果的な情報発信が可能になった。	A	(1) ホームページ編集権限を全教職員へ付与した結果、迅速な情報発信には寄与したが、何をどこに書くかなど、全体的なデザインの統一はできなかった。また、原因不明のエラー等も見られたので、編集者に対してCMS問い合わせ窓口を案内する必要がある。 (2) 「観点別学習状況の評価と評定との齟齬チェック」および「調査書たたき台生成」については、学年主任の先生方から好評を頂いているものの、本業務を正確かつストレスなく行うためには基本的なプログラミングの技能が必要であり、属人化してしまっている。このままでは持続可能でないため、情報事故が起こることなく無理のない仕組みづくりが必要である。 (3) 標的型訓練メールを開封してしまった職員が数名いたため、引き続き相談しやすい風土づくりに努める。 (4) Active Directory サーバーの構築は今年度断念した。今年度、校務用PCにデータを保存しPC故障のためデータを失ってしまった案件があった。情報セキュリティにおける「可用性」を担保するため 急ぎ 取り組
	校務支援システムの安定した運用。	教務部との連携を図り、校務支援システムの円滑な運用を行う。	観点別学習状況の評価と評定との齟齬について、教務部からの依頼を受け、チェックの機械化を図ることができた。	A	
		校内ネットワークの安定した運用管理と保守を行う。	指導要録「総合所見及び指導上参考となる諸事項」から、調査書「指導上参考となる諸事項」執筆のたたき台を生成するのに、機械化を図ることができた。	A	
校内ネットワークの整備とセキュリティ管理。	個人情報の保護と情報管理の徹底を図り、セキュリティ向上に努める。	特に大きな情報漏洩は見られなかった。先生方が小さな疑問でも相談して頂いたためであると考えられる。	A		

令和7年度 教科・分掌・学年等の目標達成状況と課題

評価項目	具体的目標	具体的方策	達成状況	評価	次年度(学期)への主な課題
	学習端末の導入活用。	情報機器の管理と整備を進める。	校務用PCの入れ替えをスムーズに行うことができた。また、ウイルスバスターの更新も職員の協力により、円滑に進行した。	A	ティにおける「可用性」を担保するため、急ぎ、取り組みたい。
		電子黒板等ICTの活用の補助、学習者用端末の活用の補助。	電子黒板、学習者用端末については、十分に活用できている。	A	(5)今年度に入り、電子黒板の故障が目立つ。電子黒板だけでなく、教師用Chromebook、iPad(＋校務用PC)の入れ替え計画に、急ぎ、取り組む。 (6)遠隔授業について、授業者が大きな負担なく取り組めるオペレーションを引き続き検討していく。
探究	継続的な指導計画の作成・実践・ブラッシュアップ。	3年間を見通した継続的な指導計画について、令和6年度の活動記録をもとに、土浦二高生や地域の実態に応じて改良を試み、ブラッシュアップした形で実践する。	前年の資料も参考にしながら、改良した形で、指導計画を作り、生徒の状況を見ながら臨機応変に計画を変更し、実施することができた。	A	
			1学年では、ジャパンナレッジスクールを用いて、国際協力に関する読書活動とそのプレゼンテーション、科学探究としてのペーパータワー作りとそのプレゼンテーションなどを行い、まとめ・表現に至るまでの探究の過程を経験した。	A	
			2学年では、「クアリア」(AIと人による探究支援のシステム)の試用(今年度は無料)により、グループごとの探究を深める補助を受けることができた。また、フィールドワークを実施し、探究活動に外部からの指導を得ることができた。ポスター作製について、チェックリストを作成し、生徒自身・他グループ・担当教員でチェックを行った。	A	
			3学年の探究活動では、AIも活用しながら論文作成を行った。これまでの探究活動を論文にまとめるにあたり、ある程度の水準まで高めるためのチェックリストを作成し、生徒自身でチェックを行った。また、論文集として閲覧できるように、論文とポスター写真とを冊子化した。	A	
	組織的な指導体制作り。	授業・学校行事・部活動などの様々な場面で、生徒が主体的・協働的に探究活動を行えるよう、全職員による協働体制作りを目指す。	1学年の情報科との連携では、データの扱い方や、グラフの提示方法などについて授業で扱っていただき、探究的な視点での指導場面を広げることができた。	A	(1)探究活動の3年間のつながりをより強めるために、指導案のさらなる改良を進める。
			2学年国語科との連携では、共通テストの第3問(実用的文章や資料読解型文章の問題)において、探究のプロセスを透かし見て解く演習などで、探究的考え方を指導していただくことができた。その他にも、ジャパンナレッジスクールを用いて、読書活動及びレポート作成を行っていただき、生徒に探究のプロセスの一部を経験させることができた。	A	(2)共通テストの内容に、探究的な視点で考え解く問題が多くみられるようになってきた。次年度は、情報科や国語科以外でも、連携を深めることを考えていきたい。さらに教科横断型授業の実現のために、年間指導計画の中から、どの時期にどの教科で、どのような内容を、どのように取り上げていくのかを、各教科の年間指導計画と照らし合わせながら、各教科と話し合い連携を深めたい。
			1学年の探究活動では、ジャパンナレッジスクールを用いた探究活動とその発表を複数回実施することができた。	A	(3)ジャパンナレッジスクールの活用をさらに進め、信頼性の高い資料を用いて探究的に思考する場面を多く設定できるようにしたい。
			今年度の2学年の探究活動では、学年団＋学年外の教員のみで指導に当たった。(※前年度は全職員が指導に当たった)担当者による温度差が少なくなるように、毎時間指導案と説明スライドを作成していただいた。	A	(4)探究を支援するシステムを、どのように導入し活用するのかを検討したい。(今年度のクアリアは試用)
			2学年の探究活動から、茨城ドリームパスへの全員応募や、外部の発表会に参加するなど、学校外に広げることができた。様々な場面で生徒の活動を支援できた。	A	
			現3年生が2年時に作製した探究ポスターのうち、相互評価で優れているとされた24本について、文化祭で掲示を行った。説明時間は取れなかったが、多くの生徒、来校者に見てもらうことができた。	A	
			学年団、学年外の協力で各学年の探究活動を支えることができた。	A	
	探究活動成果の論理的表現活動の支援。	探究活動の過程や成果のプレゼンテーション等、表現の機会を作り、質疑を通して対話的な学びを推進する。また、発表の機会に相互評価することで、発表技術の向上を促進する。	グループ内での討議の機会を多く作ることで、表現力を高め、対話的学びを実施することができた。	A	
			各学年の発表(クラス内発表含む)を複数回実施し、発表での質疑応答などを通して、対話的に学びを深められた。	A	
			1学年の発表では、項目ごとの相互評価を行い、優れた発表を学年で共有する活動を行った。	A	

令和7年度 教科・分掌・学年等の目標達成状況と課題

評価項目	具体的目標	具体的方策	達成状況	評価	次年度(学期)への主な課題	
			2学年を中心に、発表の前後、当日などに、外部からの指導者を配置することができた。(チャレンジプロジェクトを利用) 特に、発表会直前の活動では、クアリアからの指導コメント付きで返却されたレポートや大学生アドバイザーからの指導を参考に、これまでの探究の流れをまとめ、深めるとともに、発表技術の向上を図ることができた。	A		
事務	施設設備の安全確保と学習環境の整備。	校舎内外の巡回を行い施設設備の使用目的、使用状況を多面的に把握して、教育環境の適正な整備を行う。	今年度普通教室照明をLEDに交換し、授業中の蛍光灯切れをなくした。故障・破損に対しても速やかに対応した。	B	B	LED化に向けて、特別教室などに今後順次交換していく。また老朽化している部分についても順次予算を確保していく。
	予算の効率的・効果的な執行。	適正な学校運営のため、管理職や教職員等と連携を図、ICTを活用しながら学校予算の効率的・効果的な執行を行う。	必要な分野に対し、効果的に予算配分し、執行を行った。不足した予算は最終補正で増額予算を獲得し、対応した。	B		
第1学年	予習・復習の習慣化と家庭学習時間の確保。	学習時間調査、個人面談の実施。	個人面談や学年集会を通して、予習・授業・復習の学習サイクルの重要性を伝えることができた。また、教科担当者間でも生徒情報を共有して支援ができた。	A	A	(1) 学習習慣の確立・定着と学習時間の確保 (2) きめ細やかな個別面談を通じた進路・生活指導 (3) 校外模試の有効な活用 (4) 成績層別による学習指導 (5) 様々な理由で欠席しがちな生徒とその保護者に対する精神的な支援
		適切な学習課題の提示、小テストの実施。	全体の課題の量を調整し、生徒が自ら学習計画を設定できるように工夫した。	A		
		各種課外の実施、外部英語検定、海外研修等への対策、サポート。	平常課外・長期休業中課外など、英数国を中心に精力的に実施した。	A		
	新教育課程、入試改革への対応。	主体的、協働的な「探究」を実現するICTを活用した授業づくり。	学年・教科classroomを開設し、効果的に学習課題を提示することができた。スタディサプリを採用し、自学自習に活用した。探究の時間の様々な場面においてICTを効果的に用いて活動することができた。	A		
		自分の考えを可視化し、論理的にわかりやすく伝える力の育成。	オープンキャンパス報告会を実施して、自分でオープンキャンパスの内容をまとめ、スライド作成をし、クラス発表を実施し、Googleフォームで振り返り評価を行い、学年通信でフォードバックした。	A		
		「探究」含め、あらゆる授業におけるICT(タブレット等)の積極的活用。	スタディサプリを活用し、探究の時間だけでなく、授業やホームルーム活動でICTを積極的に活用した。	B		
		活動履歴の作成等、新方式の入試に対するサポート。	ベネッセ提供のマナビジョンを利用し新課程入試の科目調べを行った。探究の時間で学習したものはオンライン上に記録した。	A		
	確かな職業観の育成と適切な文理コース分け。	個人面談、保護者面談の充実。	個人面談を頻繁に実施し、生徒理解に努めた。また、保護者面談では綿密な情報共有を行うことができた。	A		
		各種講演会、説明会、各種課外の実施。	ベネッセによる文理選択に関する集会を実施した。また性に関する講演会やスマボ安全教室なども実施した。	A		
		各種ガイダンス、セミナー、オープンキャンパス等への積極的参加の推奨。	職業観育成の一環としてキャリアガイダンスを実施した。また、オープンキャンパスやフロムページの「夢ナビ講義動画」と関連づけてオープンキャンパスへの参加を促した。提出したレポートから多くの生徒が参加し、自己の将来像を考える良い機会となったことが確認できた。	A		
		校外模擬試験の実施と結果分析、事後の有効活用。	ベネッセ模試を3回実施。河合塾全統模試を1回実施した。実施後は学年会で分析会を行い、基礎学力の向上の方策について検討した。	B		
	高校生らしい服装容儀の徹底。	服装、頭髮検査の実施、及び日々の学校生活、授業の中での指導、説諭。	制服の着こなし、身なりを正す大切さや、場面に応じた言葉遣いなど、日々の学校生活で折にふれながら指導した。	A		
	規範意識の高揚と道徳的実践力の育成。	道徳の授業やHR、清掃活動等を通しての、道徳的な判断力や態度の育成。	清掃活動を通して、協同することの大切さ、勤労の価値観を学ぶことができた。	A		
	交通安全指導の充実。	生徒指導部との連携による校外指導の実施。	地域の方から自転車のマナーについて苦言をいただくこともあったので、その都度各クラスでマナーを守ることの大切さを伝え、自分事として考えられるように指導した。	A		
HR活動等を通じた交通安全指導の徹底。		交通講話を通して、危険を回避して安全に生活することの重要性を学ぶことができた。自転車の安全な利用について引き続き指導していきたい。	A			
心身の健康管理及び教育相談の充実。	SC、養護教諭、保護者等との連携強化。	様々な困難を抱えている生徒と保護者に対して、面談やカウンセリングを実施し、丁寧に問題に対処した。養護教諭やSC、SSWとの連携も含め、チームとなって支援することができた。	A			
第2学年	既習内容の確実な定着、教科の特性に応じた適正な予習復習の習慣化と家庭学習時間の確保。	個人面談の実施、小テストの実施、適切な課題量の調整。	個人面談を複数回実施することで、個々の生徒の諸課題に対処することができた。小テストを週1回実施し、生徒の基礎学力の定着に役立てることができた。生徒が家庭で取り組むことができる課題量となるように調整し、学習習慣の定着を図ることができた。	A		
		ICTを活用した適切な学習課題の提示。	各科目の授業においてclassroomを活用したり探究においてICTを効果的に用いたりして、協働的な活動を行うことができた。	A		
		小論文指導、英語外部検定対策の継続。	小論文はガイダンスを経て小論文模試を実施し、英語外部検定についてはスピーキングや英作文の指導を継続することができた。	A		
		土曜課外や長期休業中の課外の実施、内容の充実。	土曜講座ではPスタディを活用することで、共通テスト「情報I」を意識した学習支援ができた。夏季・冬季課外は、英数国を中心に学習のつまづきを解消し、学習内容を定着させる良い機会となった。	A		
					(1) 学習時間の確保と学習習慣の定着	

令和7年度 教科・分掌・学年等の目標達成状況と課題

評価項目	具体的目標	具体的方策	達成状況	評価	次年度(学期)への主な課題				
	進路目標の具体化。	オープンキャンパスの積極的活用、探究活動の実施。	フロムページの「夢ナビ講義動画」をオープンキャンパスの情報源として活用することができた。フィールドワークを取り入れた探究活動を通して、課題解決に必要な情報収集力や分析力を育むことができた。	A	A	(2) 適切な志望校決定と進路実現に向けた、個別面談等の支援・指導 (3) 課外等における効果的な成績層別指導 (4) 校外模試の有効な活用 (5) 様々な理由で欠席しがちな生徒とその保護者に対する精神的な支援			
		各種講演会・説明会・ワンデーカレッジの実施。	ワンデーカレッジや科目選択説明会、外部講師による講演会によって進路意識の向上を図ることができた。	A					
		校外模擬試験の実施と結果分析、事後の有効活用。	校外模試実施後は学年会で結果分析を行い、基礎学力の向上の方策や成績層別指導について検討した。ベネッセマナビジョンを活用し、模試の目標設定から復習まで意識的に取り組ませることができた。	A					
	高校生らしい服装容儀の徹底と規範意識の高揚。	服装容儀指導の実施及び日常生活での注意喚起・指導。	制服の着こなし、身なりを正す大切さや、場面に応じた言葉遣いなど、日々の学校生活で折にふれながら指導した。	A					
	交通安全指導の充実。	生徒指導部との連携による校外指導の実施。	地域の方から自転車のマナーについて苦言をいただくこともあったので、その都度各クラスでマナーを守ることの大切さを伝え、自分事として考えられるように指導した。	A					
			H R 活動等を通じた交通安全指導の徹底。	登下校中の怪我や車との接触に関する事案があったため、危険を回避して安全に生活することの重要性について引き続き指導していきたい。			B		
	心身の健康管理。	S C、養護教諭、保護者などとの連携強化。	S Cや養護教諭と情報を共有し、保護者とも連絡を密に取ることで、生徒の支援や理解に役立てることができた。	A					
			生徒個々の問題の早期発見、及び適切な支援。	生徒個々の問題が発生し、対応に苦慮する事案があった。専門職の方に相談しながら、問題解決に向けて支援を続けた。			B		
	第3学年	家庭学習時間の確保。 (平日4時間、休日10時間)	個人面談の充実(年6回以上)。	面談週間でクラス一斉面談を3回、保護者面談前の予備面談を2回、進路に関する面談を各クラス1~2回実施できた。その都度、学習状況の確認をし、生徒に助言をすることができた。			A	A	(1) 難関大学を目指す生徒への指導の強化 (2) 入試の多様化への対応力の強化 (3) 模擬試験の更なる有効活用 (4) 成績層別による学習指導
			進路講演会、模擬試験成績分析会、進路説明会等の実施による動機付け。	ベネッセ講師による進路講演会や進路に関する学年集会を複数回実施し、大学入試に関する情報を適切に伝えることができた。			A		
進路指導の充実。		進路希望に適した授業の充実。	11月から進路対策編成時間割で授業を行い、共通テスト対策演習の授業を進めることができた。	A					
		進路指導室、資料室、I C T 環境等の活用の促進。	大学入試過去問題集(赤本)を豊富に揃え、生徒たちが活用できるように環境を整えることができた。	A					
国公立大学、難関私立大学への合格者増を目指した指導の工夫及び充実。		課外、探究活動の充実(受験対応講座の実施)。	国公立大学や私立大対策など、各教科充実した内容の課外授業を実施した。探究活動では、データサイエンスに関する活動や進路探究としての活動を充実させることができた。	A					
		成績層別課題提示等の工夫	ベネッセの模試では個人の学習状況に応じた復習問題を提示してくれるため、そういった問題に積極的に取り組むよう促した。また授業や課外などで成績層を意識した課題を提示し、生徒の主体的な学習へとつなげた。	B					
		校外模擬試験の実施とその有効活用。	例年同様模試を実施した。模試の結果を過年度や他校、前回と比較して、結果が振るわない場合、学年会の議題として取り上げ、対策を検討した。	A					
最終学年にふさわしい服装容儀、挨拶の徹底。		服装、頭髮検査の実施及び日常生活における指導。	普段から学年全体で共通認識を持って指導することができた。	B					
交通安全指導の充実。		生徒指導部との連携による校外指導の実施。	L H R を使い、年度始めや長期休業前に重点的に指導を行った。	A					
心身の健康管理及び教育相談の充実。		S C、S S W、養護教諭、保護者等との連携強化。	不安を抱えている生徒や保護者に、専門の先生の力を借りて、適宜対応することができた。	A					
			生徒個々の問題の早期発見、及び適切な支援。	生徒や保護者と密に連絡を取ることで、生徒の思わしくない兆候に対応し、学年で情報を共有することができた。	A				
いじめ防止		いじめの未然防止。	道徳以外の教科でも相互指導力・協同性・同僚性をポイントに置いた授業を実践する。	ペアワークやグループワークを通して、自己指導力及び自己有用感を育む授業を実施することができた。	A	年3回はいじめに関するアンケートをGoogleフォームで実施することができた。出てきた案件に対しては、担任だけでなく、学年、生徒指導部、管理職などチームで対処することができた。常に「いじめは必ず起こる」という認識のもと、未然防止・早期発見を心がけている。			
			H R、学校行事、特別活動の場を利用し、自己存在感を養う。	文化祭やスポーツ大会などの行事を通して、一人ひとりが活躍する場を創出することができた。	A				
	生徒が教職員と相談しやすい関係を構築する。		面談やフランクな雑談をすることで、相談しやすい関係の構築に努めた。	A					
	情報モラル教育を推進する。		「スマホ安全教室」を活用した。	A					
	いじめは必ず起こるという認識のもと、生徒の観察を怠らず、決してサインを見逃さないように努める。		授業だけではなく、部活動の場でも教職員が生徒からのサインを見逃さないように努めた。	A					
	いじめの早期発見。	ICTを活用しながら年間3回のアンケートを実施する。	Googleフォームを利用し、アンケートを実施した。	A					
			生徒や保護者が学校に相談できる関係を構築する。	夏季・冬季の面談を通して、保護者とも相談できる関係を構築できるように努めた。	A				
		複数の相談窓口を生徒や保護者に周知する。	S Cや養護教諭から生徒についての情報を提供してもらい、共有できた。	A					
	いじめの早期解消。	定期的な生徒の様子等の報告会を実施する。	協議委員会時に、各学年の生徒の様子を共有した。	A					

令和7年度 教科・分掌・学年等の目標達成状況と課題

評価項目	具体的目標	具体的方策	達成状況	評価	次年度（学期）への主な課題
		いじめを認知した場合の連絡系統を確認しておく。	定期的な「いじめ対策会議」の開催により、教員間の連携をとることに努めた。	A	A
		いじめを認知した場合まずは実態把握に努め、速やかにケース会議を開き対応を検討する。	速やかに管理職及び関係学年と連携し、「いじめ対策会議」の開催や実態把握に努めた。	A	
		インターネットを通じて行われるいじめにも適切に対処する。	いじめに関するアンケート調査を実施した。	A	
		保護者と密接に連絡を取り合う。	生徒に関して気になることがあれば、保護者と綿密に連絡を取り合うように努めた。	A	
	関係機関との連携。	地域の協力を得ていじめの対応等をする。	学警連の会議に参加し、連携を図っている。	A	
		警察、児童相談所、法務局等の関係機関と連携する。	学警連の会議に参加し、連携を図っている。	A	
		学校以外の場で起きたいじめに適切に対応する。	いじめに関するアンケート調査を実施した。	A	
		実践的研修を行う職員研修を設定する。	SC及びスクールロイヤーによる研修会を実施した。	A	
	教職員研修。	事例研究を通して、いじめの対応方法の共通理解を図る。	SC及びSSWの研修会を実施し、様々な事例の研究に努めた。	A	
		インターネット環境等に関する研修を計画する。	「スマホ安全教室」を活用した。	A	

※評価規準：A:十分達成できた B:達成できた C:普通 D:やや不十分だった E:不十分だった